

2023年5月22日

立教大学国際学術研究交流制度
2023年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	異文化コミュニケーション学部・教授
	氏名	山田 優
受入学部・研究科・研究所		異文化コミュニケーション学部
招へい 研究員	所属・職	Dublin City University 所属機関所在国：アイルランド
	氏名	笹本 涼子
招へい期間		2023年4月17日～2023年5月17日（31日間）
研究経費		851,300円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2023年4月17日	来日
4月19日	大学院セミナーを開催。テーマ「ソーシャルメディア、ビューアーコミュニティ、スクリーン上の翻訳機能などにおける語用論的研究の可能性について」関連性理論の説明とSNSコミュニケーションなどについて討論を行う。9206教室（15名参加）
4月22日	合同セミナー：翻訳研究の持続可能性。関西大学の阪本彰子教授、DCU ジョス・モーケンス准教授、立教大学 武田珂代子教授、および立教大学大学院生が集合して、国際交流を含めた研究共有会、翻訳研究の未来について語った。A201教室（12名参加）
4月26日	
5月3日	セミナー：オノマトペと翻訳と関連性理論について。9206教室（15名参加）
5月10日	セミナー：語用論と翻訳学（1）9206教室（6名参加） セミナー：絵文字とリアクション GIF における感情のコミュニケーションについて。9294教室（22名参加）
5月17日（変更）	セミナー：語用論と翻訳学の接点（2）9204教室（15名参加）

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

笹本先生をこの度、招へいたことによる成果は、端的に以下の3つにまとめられる。

1. 語用論と翻訳学に関する知見を深められたこと、2. ダブリンシティ大学（DCU）と立教大学という研究機関・教員・学生間の繋がりが深められたこと、3. 共同プロジェクトの可能性が開けたことである。以下に、それぞれの項目について概説する。

1) 語用論と翻訳学に関する知見の深化

翻訳学は、もともと学際的分野という特徴を色濃くしており、1970年代には語用論的転回を迎えたものの、その後、文化的転回、社会的転回等へトレンドが移行した。しかし、それは語用論が示した問題が解決したことを意味しない。翻訳・通訳の実践も多くの部分が語用論と深く関係するものであり、また現在もまだ研究される訳出プロセスの認知的解明にも語用論、特に関連性理論は大きく関わる。このような視点を蘇らせてくれた笹本氏の一連のセミナーは、研究の深化に大きく貢献した。具体的には、関連性理論を研究分析の枠組みとして用いる手法の説明を大学院生に対して行って頂いたこと、また同理論と弊大学院ゼミで中心的に扱う翻訳プロセスや翻訳テクノロジーとの接点を確認できたことである。

2) 研究機関・教員・学生間の繋がりの深化

DCUと立教大学は協定関係を結んでいるが、今回の笹本先生の招へいにより、その関係がより具体的なものになった。また同じタイミングで、同大学のモーケンズ先生も来日しており、DCUと立教の教員と学生が国際的交流できるセミナーを開催できたことは大きな実りになった。お互いの研究の詳細を共有し、対談形式でディスカッションを進めた。このことは大学院生にとっても、グローバルのトップリサーチャーらの研究に身近に触れられたことは刺激になった。また新たな相互訪問の機会を検討し、具体的に今後とも継続的な相互交流を活性化したい意向を確認できた。

3) 共同プロジェクトの可能性

上の2)を笹本先生より、DCUと立教との教員で、テクノロジーの進化と通訳翻訳についての対談を新たに企画し、書籍出版をしたいという具体的な共同プロジェクトの提案が最後になされた。また、6月下旬の韓国での学会での共同発表、DCUで進行するプロジェクトのデータ収集など、具体的な共同プロジェクトの進捗確認も行われた。



笹本涼子先生による大学院・学部セミナーの様子